

せわやがトカラ情報

南北 160 km 「心をつなぎ気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822 鹿児島市泉町 13 番 13 号
TEL 099-227-9771

7 月…台風と十島村

十島村教育長 有村 孝一

一喜一憂という言葉があります。意味は、状況の変化などちょっとしたことで、喜んだり不安になったりすること。また、まわりの状況にふりまわされることです。今月も台風 9 号、10 号、11 号と立て続けに発生し、そのたびにその進路の行方に文字通り一喜一憂しているわけです。

自然環境が厳しいと言っていますが、中でも台風の襲来は、その最たるものであります。いろいろな行事を計画していても、台風で一瞬にして中止になるというのは、十島の人々にとって何とも言い難いことだと思います。今回も 2 航海が欠航となり、その間 10 日間も船の往来のない日が続きました。

教育委員会関係を見ましても、小中学校の集合学習や ALT（外国語指導助手）の派遣、ファミリー劇場の派遣など、台風に関わらず天候不良により、延期したものが数多くあります。そのような中であっても、何とかスケジュールをこなしていかななくてはなりません。このことは、計画立案の段階で、幾通りかの代案を持っていなければならないということです。

このように、ひと手間加えながら、村の行事は遂行されていくわけです。ですから、行事が終わったときの安堵感は大変なものです。一方で十島村での仕事の醍醐味を味わうのもこのような時ではないかと思えます。

自然の厳しさと切っても切り離せない十島村ですが、山海留学生の児童生徒は、そんな十島村で自分を変えよう、変わりたいという思いを持って日々それぞれの島で頑張っています。たくましく凛々しく成長する姿を見ると、台風なんか負けないぞ、というたくましさを感じます。

「頑張れ」は「願晴れ」とも書きます。「願晴れ」は最後に顔が晴れるように、笑顔になれるように、今をしっかりと過ごして乗り越える。辛いことも、きついことも、苦しいことも、顔が晴れるための試験ということでもあります。村中の子どもたちが、台風なんかには負けないで、いつも晴々とした顔でいますように願うばかりであります。

また、南の海上に台風 12 号が発生したようです。島の人々は、どんな思いでこれを迎えるのでしょうか。自問自答していると、フェリー「としま」は、欠航で増えた荷物を載せて 23 時に出発していきました。

TV 会議で授業公開



7 月 13 日（月）悪石島中で永田先生の英語の授業がテレビ会議システムを活用して行われました。参加したのは、口之島中、中之島中、諏訪之瀬島分校、宝島中の 4 校です。

悪石島中の 2 名の生徒に更に 7 名の生徒が加わり 9 名の授業になりました。自己紹介文を離れた別の島の友だちに発表したり、質問したり答えたりして、居場所の違いを超えてまるで同じクラスで授業を受けているかのようでした。音声と画像が頼りですが、英語専科の先生の授業を一齐に受けることができるよきも、このシステムならではことです。他の島の生徒と一緒に授業を受けるられることは、十島村の中学生としての一体感も生まれることなのでしょう。一つの教室での授業とまったく同じというわけではありませんが、居場所が違いながらの双方向のやりとりができるのは、テレビ会議システムのよきです。今後も、このよきに着眼して、小中学校でさらに活用が深まっていけばいいと思います。役場の 4 階でテレビ会議システムの画面を見ながら「英語で自己紹介や質問をし、お互いのことを知る。」という本時の目標に向かって 4 校の生徒が同じ先生の授業を受けることができるというよきを感じることでした。板書に「発表順、口→中→諏→悪→宝」とあったのが、テレビ会議らしくて、とてもユニークでした。



「水に親しみながら 3M 運動
みんなで めざそう 水の事故ゼロ」
(児童生徒等水難事故防止対策連絡会)

シリーズ——島で暮らす
十島村の学校で生活して
「宝島での 1 年 3 か月」
宝島小 4 年 福島 嘉津穂

○ 昨年 4 月、ぼくとお母さん、お姉ちゃん、妹の 4 人は、宝島に引っ越してきました。それまでは、お父さんだけが宝島にいて、ぼくたちは、みょう円寺というところにはなれてすんでいました。なぜかというと、

お姉ちゃんと妹にしょうがいがあり、島にはない病院に通わなければならなかったからです。でも、やっぱりみんなそろって過ごしたいという家族の思いから、お父さんとお母さんが、たくさんの人に協力をもらって、ようやくこの宝島で、いっしょにくらせるようになりました、お父さんといっしょにくらせるようになることはとてもうれしかったのですが、引っ越しする前は、不安な気持ちもありました。ぼくと同じ三年生は女の子二人だったので、「友だちになれるかな。」とか「中学生はどうか。」といういろいろ考えました。いよいよ学校に通うようになりました。すると、そんな心配はすぐにふきとびました。その年のじどう生との数は 12 人と、前の学校のクラスよりも少ない人数でしたが、とてもなかがよく、先生達も気軽に声をかけてくださいました。お姉ちゃんのこと心配でしたが、みんなが登下校の時に手をつないでくれたり話しかけたりしたので、僕は「宝島に引っこしてきてよかったなあ。」と心から思いました。



それから 1 年以上が過ぎました。今年は、じどう生との数は 15 人にふえました。みんな変わらずにやさしく、ぼくもずいぶん宝島にくわしくなりました。自ぜんがいっぱいで、ぼくのすきな虫もたくさんいます。この前は、家の前のミカンの木にカラスアゲハのよう虫がいたので、学校で飼って羽化させることができました。宝島小学校に通うようになって、勉強もよくわかるようになりました。字もきれいに書けるようになりました。みんなに教えてもらって自転車にもものれるようになりました。ぼくが、今、がんばっているのが、じゆう道とスティールドラムの練習です。上手になったぼくのすがたをお父さんに見てもらおうのが何よりも楽しみです。

この大好きな宝島で、家族いっしょになかよくすごしながら、これからもいろんなことを学んだり、できるようになったりしたいと思います。

十島村の先生たちの研究会

7 月 23 日と 24 日の 2 日間にわたり、鹿児島市の勤労青少年ホームで十島村の先生たちの研究会がありました。教科の専門部会や小学校中学校に分かれての分科会、養護教諭部会、講演会など様々な研修の中で、先生たちは真剣な表情で参加していました。



事前に提出された指導法に関するアンケートに基



づいて研究討議がなされ、教育センターの先生から指導助言をいただきました。先生たちは、メモを取りながら熱心に聴き入っていました。講演会では、県教育委員会の六笠登由指導監から「行きたい学校、通わせたい学校」と題して講話がありました。教育に僻地があってはならないと、十島村の先生たちに学力の実態や「こうすれば学力が上がる。」というポイントを具体的に御指導をいただきました。先生方は、うなずきながら自身の指導法を振り返っておられるようでした。離島の極小規模校で、しかも複式という厳しい環境の中で、先生方の悩みを少しでも解決する研究会になったのではないのでしょうか。先生方の頑張ろうという熱気が感じられる研究会でした。この夏季休業中に先生方はいろいろな研究会に参加されますが、二期からの指導に着実に生かしてほしいものです。これからも、子どもたちが行きたい学校、親が行かせたい学校を目指して頑張る先生方を、教育委員会は応援していきます。



十島村の小・中学校からのメッセージ 平島小学校諏訪之瀬島分校 教諭 東山崎洋一

諏訪之瀬島に赴任することが決まったとき、先輩の先生から「教育の原点がわかるよ。」と言われました。そこで、今回この原稿を書くにあたって、自分なりにこのことについて考えてみました。

まず、少人数という特性から子どものことを深く理解できます。そのことを生かして、子どもに合った教材を準備し、子どもの理解に応じて学習を進めることができます。このように、個に応じた学習を展開することが教育の原点の一つだと考えられます。

次に、保護者・地域の方々と、毎週の通船作業や地域の行事などを通して、連携を深めることができます。そこで、子どもの様子や教育のあり方、学校への願いなど情報交換をすることができます。これらも参考にして、協力して教育を進めることで、子どものよりよい成長につなげることができます。学校・家庭・地域が緊密に協力して教育を進めることも、教育の原点の一つと考えられます。

そして、総合的な学習の時間のタケノコ採りや春の一日遠足での魚釣りなど、地域の素材を生かした学習ができます。このような特色ある教育活動を通して、郷土を愛する心を育てることも、教育の原点の一つだと考えられます。

赴任して、1 年数か月で、多くのことを学ぶことができ、諏訪之瀬島の方々や環境に大変感謝しています。今後は、さらに教育の原点について学び続けていきたいと思っています。そして、この諏訪之瀬島で学んだことを、児童生徒や保護者、地域の方々に還元できるように、努力を続けていきます。